囚徒おぼえ書（連載第十二回）

時差のない過去

二十四分会（本所）　武松輝男

囚徒坑夫――一般的に言いならわされている囚人労働のことを語りはじめると、きまって昔のことではないか、という顔をする人が多い。語り合ったほとんど全部の人がそうであった、といってもそれは決していい過ぎではない。たしかに五十年も昔のことだから、年代的にいえばそれもいたしかたないことではある。

ところで、昔と今と炭坑はどれだけ変わってきているだろうか。採炭方法は、鶴嘴が姿を消してカッターという機械採炭に変わった。坑内照明や安全灯も、かつてのエジソン燭光や鉱油安全灯から螢光灯に変わり、電灯式安全灯に変わった。扇風機も揚水機もより大型になり、冷凍機も据わった。炭函も木製から鉄製に変わった。運搬も馬匹から電車とコンベアーに変わった。

たしかに炭坑は変わった。機械化され近代化された。誰の目にもそのように映る。それは否定しようもないことであった。

しかし、不思議なことに、囚徒坑夫時代の昔と同じように、ガス突出で坑夫が死ぬ。ガス炭塵爆発で多くの坑夫が死ぬ。落盤崩落で坑夫が死ぬ。このような近代的な設備の炭坑で、前近代的な原因で坑夫が死ぬ。その坑内は、坑夫たちの血と汗と精液と酒ヘドと糞尿と、ガスと炭塵と地下水と油と細菌が入り混っている。そしてあのすけるような臭いは、昔も今も少しも変わっていない。

このようにみてくると、炭坑というところは、過去と現在とが入り混っている。過去と現在という二つの顔を併せ持っている。見学者などに、目を見張るような巨大な設備をした、現在の華やかな顔を見せるが、三川鉱炭塵爆発や自然発火、落盤。北炭新夕張炭鉱のガス突出などの災害のときは、炭坑の過去の暗い顔が現在の顔と入れ変わり、表に顕れてくる。

さて、かつて三池炭鉱に三通りの囚徒道があった。この囚徒道に囚徒だけが渡った囚徒橋があった。この囚徒橋のことを木橋（きばし）といったり板橋といったりしている。この橋は暖溜（ぬくだまり）、青無塚（あおむつか）、役鼓女（やこぜ）と黒尾にあった。

この囚徒橋はすでにないが、これと同じ道すじを、いま人びとは歩いている。この道を歩きながら過去を透かして見ると、この同じ道を囚徒は足枷せをはめ、鉄の重い鎖で束ねられて歩いていた。

いま、この同じ道を人びとは歩いている。しかもこの同じ道を、炭坑災害で死亡した坑夫の骸が通って行く。

三池炭鉱の近郊に囚徒畑があった。青衣の囚徒たちが山を切り開き、畑をつくり作物をつくった。その囚徒畑に、いま人びとは家を建て居を構えている。そして、その家で、家族が寄り添い、煮炊きをし暮らしを保っている。

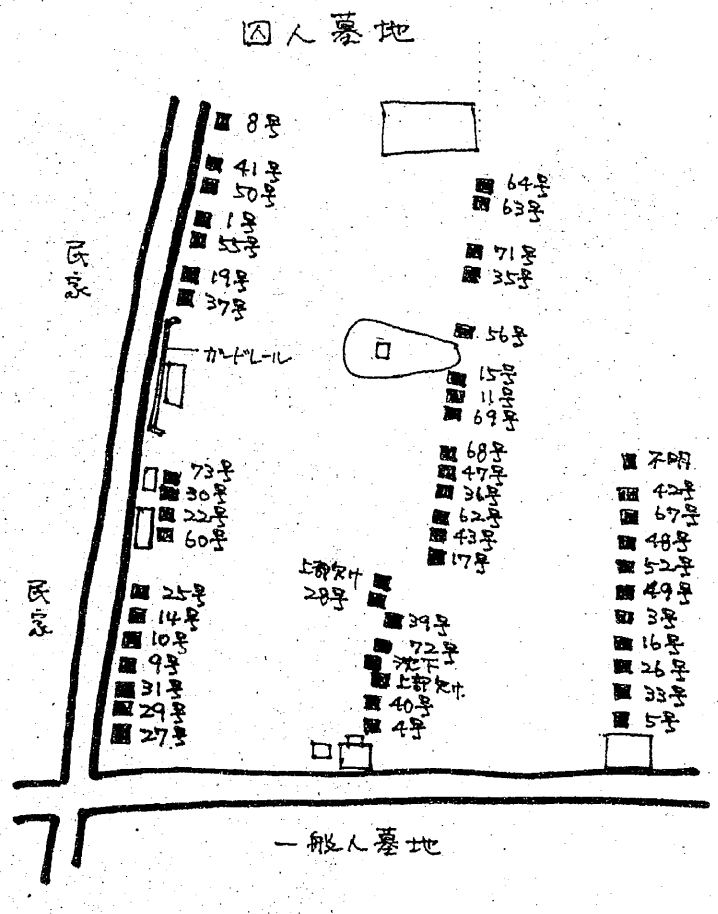
この、かつて囚徒たちが耕した畑の、その上に建てられた家から炭坑災害で死亡した坑夫の骸が、野辺に送り出されていく。

これらの葬送をみると、現在と過去が渾然となって、炭坑で働いている者たちを、重複しながら映し出してくる。

このように炭鉱というところは現在と過去のこの二つの顔を合わせ持っているのだから、炭坑を見るときは華やかな設備に飾られた現在を透かして見なければならない。そこに炭坑の、昔から変わることのない本音の姿がある。そうでないと、華やかな設備の万華鏡に照り返されてしまい、炭坑というのを見誤ってしまう。

どこの産業でもそうであるが、前史があって現代史に繋がっているものだ。ところが炭坑は、この前史が現代史にくっついている。つまり炭坑には、過去と現在との「時差」がない、ということである。

過去、三池炭坑で災害による坑夫の埋め殺しがあったという。そのような残虐さはおこるまいが、しかし災害による坑夫の苦しみは囚徒坑夫の悲惨な話は昔話しではないという時差のない過去が、雄弁に物語っている。



安見自

三月二十八日、久保清さんの追悼集会が終り急いで帰ろうとしていたら、「お花も写真も展示してあるけん見に行って」と呼びとめられました。

美しい若妻だった、あの人もこの人も、後から見ると白髪が目立ち、あれからもう二十二年なのだなあと、感慨をもって集会の中で話を聞いていた私は、あれこれのその日の日程に目をつむってきびすを返しました。

気品のある美しい生花には心を洗われる思いがしました。その奥には所せましと写真、ホッパーパイプ、闘争の記録などが並べられています。

二十余年の歳月は、世の中の辛らしも人の心も変えていますが、私たちも社宅から出たら楽になるだろうか、外来でも同じかと、役や割当が回ってくるのを苦にしてなにもない方がいいと、ひたすらわが家だけを守りたい心情でこの数年を過ごしてきました。あの時のまま活動を続けられている方も役員だけではないと思いますけれど……。

この日は、思いがけずおにぎりとおでんのご馳走が出ました。そのおいしかったこと。会議や活動で忙しい日々の中で、どんなにか大変だったろうと感謝の思いでいただきました。

会社の圧力にも屈せず、成し遂げられた主婦会の結成当時のこと。若い情熱を傾けられた青年行動隊のこと。田植えなどしたことのない人まで、参加された助け合いの思い出。弁当運びやオルグの送り出し、「凶器と見なされるから全部棒の類は燃やしてくれ、警官隊が守るから」といわれ、皆んな泣きながら燃やしたその翌日、久保さんは刺殺されたのでした。警察は労働者を守ってはくれません。

「父ちゃんが判ばつかしたけん、もう明日から遊ばれん、ごめんね」と泣いて来た子供たち。

〝燃やせ燃やせ〟の動員の歌に、無事を祈りながら見送った夜の緊張感がよみがえってきました。ピーンと張りつめた当時のありさまが今は懐しい。そして忘れることのない生きてきた重い証しとして怒りと笑いを交えながら語られました。

このままでは……

〝三池闘争を語る会〟で

三川ブロック　西田洋子

たたかいの中では、行きすぎなどが絶対なかったとはいえないかもしれませんが、命と暮らしを守るたたかいが間違っていたと思う人はいないでしょう。

分裂を避ける手だてはなかったものかと思いますが、大きな資本の力で第二組合は作られたのだから、阻むことはできなかったのでは――という声もありました。憤りと悲しみに眠れぬ夜「新聞はうそです、ラジオもうそですと、日本国中を叫んで歩きたい」と手紙を書き続けたあの日、やりきれない気持で、何日もテレビの前で泣き続けた三川鉱爆発の時を、だれが忘れることができましょう。

あと何年何カ月だと、無事に定年を迎えることだけ願いながら、すべてに消極的になっている自分をふり返り、このままではいけないことはわかっているのですが、何をしたらいいのでしょうか。集まりに参加することでしょうか。隣りの奥さんに声をかけることでしょうか。

あの当時幼かった子供たちが、三池の血を受け継ぎ、世の中の矛盾をおかしいと考える社会人として成長していることは、私共の心を満たしてくれています。職場の中でも自由にものがいえる「俺は最後まで仲間を裏切らなかった」という誇りとともに。

短歌　職場新聞まつり

二十分会（三川）　町佳郎

しょうぶ湯よりあがり来し子の輪になせるしょうぶ頭（ず）にのせ
おどけ歩むも（子供の日）
けしの花しみらに咲けば切り束ね教室に飾れと娘（こ）に持たせやりぬ
ひきつづき災害起きる左眼失明に今日大腿部を潰（ひし）がれしとう
基地の島沖縄にひしめく米兵はこの国に駐留する半数を越ゆる
復帰十年慶びなどいわぬ失業率六％困窮者の著（しる）きこの島
汗たりてたと日勤めぬはやも夏訪（と）い来しごときとおどろきにつつ
遅々（ちち）とせる歩みつづけてひととせのくぎり迎えぬ新聞まつり
亡き母を詠みし歌ひとつ職新のまつりに出（い）ださんと色紙に書きぬ
読みあぐる一等の氏名福引の会場に一瞬喚声あがる
串焼きにおでんビールに樽酒と新聞まつりは大きにぎわい

六月の生活メモ

○…いよいよ夏、一日は衣替え。暦の上では十一日が入梅、二十二日が夏至です。六月は歯の衛生週間（四日～十日）、環境週間（五日～十一日）と行事の多い月。核兵器絶滅という人類の悲願をこめて、第二回国連軍縮総会が七日に始まり、七月九日まで続きます。二十日は父の日。いまだに若い文学ファンの人気を集める作家太宰治（一九〇九～四八年）の桜桃忌は十九日です。

○…今年の梅雨はむし暑い日が多く、雨は少ない見込みと気象庁の長期予報が出ています。日本列島にとって、梅雨はたいせつな水資源。晴れが多いと喜んでばかりもいられません。梅雨入りは平年並みか、やや遅くなりそう。西日本では局地的な大雨がふるおそれがあります。

○…雨の季節の必携品はカサです。雨の多い日本では、国民一人平均二・五本のカサを持っているとか。折りたたみガサは便利でも丈夫で長持ちは「長もの」と呼ばれる普通のカサ。使用後は小まめに干せば寿命が伸びます。

【連合】

集会と催し

はぐるま座
「諸りと海」公演
日時　六月三日（木）午後六時
場所　大牟田市民会館
主催　大牟田公演実行委員会
推薦　福岡県評、大牟田地評
券は組合で扱っています。家族券三千円（大人二人と小中学生一人）、一般券千五百円、高校生千円、小中学生五百円。

荒地評囲碁・将棋大会
日時　六月六日（日）午前九時半から
場所　荒尾労働会館

護憲・反戦・反核
非武装大講演会
日時　六月十八日（日）午後五時半から
場所　大牟田市民会館
講師　社会党副委員長　石橋政嗣氏ほか
整理券　五百円

宣言タイム競技で優勝

前田忠さん（十分会・三川）は五月十六日、大牟田市延命陸上競技場で行われた、第五回宣言タイム陸上大会で三千五百メートルの部に出場、見事自己の宣言したタイム通りに走り優勝しました。